

司法試験に向かう

背中を押してくれたのは

東明館の6年間。



古賀・花鳥法律事務所
弁護士 つる 拓剛 たくま さん
東明館高等学校 1 1 期生
京都大学法学部卒
京都大学法科大学院修了

遠く霞んで見えた法の世界への入り口は、東明館の校門だった。

父と祖父が法律に関係する仕事をしていたことから、弁護士という職業は小さい頃からとても身近でした。ぼんやりとですが、中学や高校できちんと勉強して将来は法の道に進みたいと思っていましたので、地元の久留米から通える中高一貫の東明館を見に行きました。先に通っていた5つ年上の従兄弟が毎日いきいきと楽しそうにしているのを見て、憧れていましたが、見学に行ってみるとますますその気持ちは強くなりました。無事に合格した時は本当にうれしくて、当時まだ新しかった校舎のきれいさや私たち生徒のために熱心で親切な先生方にただただ目を輝かせる毎日でした。中学生の頃だったか、授業でわからないところがあり、職員室に質問をしに行ったことがありました。タイミングが悪いことに先生はちょうどお食事中でいらしたんです。麺物だったように記憶していますが、麺がのびて食事が冷めるのもいとわず、私がわかるまで丁寧に教えてくださって、「なんていい先生なんだ！」と感動しました。

授業に真剣に取り組むこと。それが大学受験合格へのパスポート。

授業は難易度も高く、スピードも早かったと思いますが、先生方の教え方がわかりやすかったおかげか、不思議とついていけないと思ったことはありません。古典の先生は、語呂合わせやリズムを使っておもしろく感じるよう

に進めてくださったり、授業のひとつひとつが聞き応えたっぷりでした。科目ごとに得意な友達同士で教え合ったりしたのもいい思い出ですね。友人たちはみな、いいライバルでもありました。彼らの存在があったからこそ日頃の勉強も受験勉強も立ち止まることなく前に進めたのだと思います。飄々として勉強してなさそうに見えるのに学年トップクラスなんて人もいたし、とにかく同い年とは思えないくらい優秀な子がたくさんいたのでそれが刺激となって、自然と努力をするクセがついていたのかもしれませんが。分からない問題があったときなど、休み時間も勉強することがありましたが、宿題はそんなに多くなかった気がします。勉強一辺倒ではなく、中学生時代はサッカー一部にも入っていました。それもいい気分転換になっていましたね。東明館には明文化した校則らしい校則はなく、のびのびと過ごすことができました。自由と厳しさは表裏一体と言いますが、自分は管理される対象ではなく、ひとりの人間として信頼されているんだという、いい意味での自尊心や自律心が育めたように思えます。

6年間の中では将来や就職について意識するキャリアガイダンスのような時間もありました。そうした時間を通して、中高生ながら自分の得意分野ややりたいことについて思いを巡らせ、ゴールを明確にすることができたのだと思います。医大や医学部を目指す同級生が多かったので、私も途中でつられて医学部を目指そうかなと迷ったこともありましたが、やはりそこは初志貫徹で夢へと進むことに決めました。中でも京大を目指した理由は、意外に単純で「京都に住みたかったから」(笑)。親からも「京大以外はダメ」とプレッシャーを掛けられていました。高校3年時に一部の科目について予備校の授業を受講したこともありましたが、学校での勉強や自習だけでも十分に手応えを感じることはできました。それもひとえに先生方が、「勉強=イヤなもの」ではなく、解ける・わかるおもしろさを教えてくださったから。どの科目も基礎が肝心であり、学校の授業だけでも十分に理解できていれば、志望校に合格することは可能であると思います。

「勉強+α」という独自のスタイルも東明館で築いたもの。

無事に京大に合格した私は、親に「大学は4年で卒業するつもりはない！」と宣言しました。よく意外と言われるのですが、実は高校時代からストリートダンスにも打ち込んでいて、東明館の文化祭のステージでも一度だけ披露したことがありました。大学では留年をして少し立ち止まろうと思ったのもストリートダンスに集中するため(笑)。勉強が嫌いだったわけではありませんが、学問以外のことに全力でエネルギーを使いたくなってしまっただけです。私に限らず、当時の京大法学部では、学問以外のことに情熱を傾け過ぎて留年する学生が珍しくありませんでしたので、私も学友とともにきちんと(?)留年し、ストリートダンスに明け暮れました。100人以上が所属するストリートダンスのインカレサークルの会長まで務めて、学内外問わずいろんな人と出会えたことはその後につながる大きな財産になりました。

仲間と共に、夢に向かって真っ直ぐに。

京大法学部卒業後は、遊びほうけた大学時代にひと区切りつけ、司法試験という目標に臨みます。簡単に行き着けるゴールではありませんでしたが、東明館時代にしっかりと授業についていき京大合格という結果を出せたことが一つの自信となっていました。司法試験合格のために同じ志を持った仲間と共に法科大学院で切磋琢磨しながら、

東明館時代を噛み締めていました。無事にストレートで合格し、司法修習生として法律の世界の入り口に立ち、弁護士・裁判官・検察官、どの方向に進むか少し迷いました。それぞれの職種にはそれぞれの魅力がありましたが、やはり依頼者のパートナーとして人生の重要な部分で力になりたくて弁護士の道へ。弁護士として初めて立った法廷では、緊張とプレッシャーで吐き気をもよおす程でした…。学生時代に裁判を傍聴したこともあったし、何度も何度も入念にシミュレーションしていたのに頭が真っ白になってしまったんですね。あれから数年、緊張感は忘れていませんが、経験値を積み重ねてもっといろいろな人のお役に立ちたいという気持ちは変わりません。自分との戦い、いい意味でのライバルを意識した戦い、毎日しっかり積み重ねてきた東明館での日々と自信がいつだって私の背中を押してくれるんです。後輩のみなさんも学生時代を楽しみながら、よく学び、よく遊んでください。毎日一生懸命過ごしていればおのずと夢が見つかると思います。

中学・高校と6年間一緒に過ごすので友人との絆が深まるのも東明館の良さ。3年前、ちょうど30歳になったのを機に、久しぶりに同窓会をしようと思立ち、声をかけたら思ったより大勢集まってくれたんです。それから毎年続けています。今はみんなそれぞれ全然違う仕事をして、一人前の社会人ですが、会うとすぐ当時の空気に戻って、顔がくしゃくしゃになるくらい思い出話に花を咲かせていますよ。